

「ホメオパシーとは何か」

荻野哲也

昨日学んだ「ある 45 歳の男性」のケースについて、もう少し考えてみましょう。

彼は、ホメオパシーによって、5 年間悩んだ「けいれん発作」から、解放されました。(根治！)

一方、通常医療では、何が起きていたのでしょうか？

◎ホメオパシーでは、「症状の全体像(総体)」を観ました。そして、「病人の心身全体に起きている乱れた状態」に対してアプローチしました。(オルガノン § 1)

その時に、ホメオパスが観たものは、「症状の全体像(総体)」でした。(オルガノン § 3-1)

「症状の全体像」に類似したレメディを投与して、根治しました。(オルガノン § 3-2/3)

ホメオパシーでは、「病」は「症状の全体像」として表現されていると受け止めます。そして、その「症状の全体像」に類似したもの(レメディ)を使って健康再建を図ろうとします。

◆通常医療は、「部分」だけを観て、その不快な部分症状を抑制しようとしてしました。

「痙攣発作」に対して、抑圧する薬剤を治療に使いました。

その薬剤が、もたらしたものは、何でしょうか？ 痙攣発作(部分症状)の多少の抑圧緩和と副作用です。

確かに痙攣発作の発症頻度は多少減りましたが、相変わらず起きました。そのたびに薬量は増えてゆき、やがて副作用が強くなり始めました。45 歳の男性に起きた副作用は、いくつかあります。思考力低下・集中力低下・目眩・ふらつき・歯肉の腫れ などです。

■副作用とは、何でしょうか？

当時服用していた薬剤(抗痙攣剤／アレピアチン錠)を調べると、主作用「てんかんの発作などを抑える薬」と記されており、その後に、膨大な「副作用」情報が続きます。抗痙攣剤には、こうした副作用(症状)を起こす作用があることを示しています。(別紙参照)

つまり薬剤には、主作用とともに膨大な作用(副作用)を起こす力があるということが分かります。

症状の全体像(総体)と三つの療法

■症状の全体像(総体)

ホメオパシーと通常医療(アロパシー・アンチパシー)との大きな違いは、その人の全体をみるか、部分を見るかにあります。ホメオパシーがホリスティック(全人的)と言われるのはこのためで、通常医療のように眼科や耳鼻科や口腔外科や皮膚科などに分けることはしません。

ホメオパシーで「全体像」を指す言葉は、「症状の総体」です。「症状の総体・全体像」とは何のことでしょうか。

なかなかとらえにくい概念ではないでしょうか。

(例)全体として「みかん」に似たものは、何でしょうか？

レモン・きんかん・グレープフルーツ……色々思い浮かびます。

では、全体として、「みかん」と反対なもの・逆のものは、何でしょうか？

全体として反対のものは存在しません。例えば、みかんに似たものは存在しますが、みかんの反対のものは存在しません。犬に似た動物はいますが、犬の反対の動物は存在しません。病気も同様です。癌の反対、肺炎の反対、新型コロナウイルスの反対は存在しません。

◎MindとGeneralとPartial(Focus マテリア・メディカをみてみましょう。)

病の全体像というとき、大きくは Mind(精神・感情)と General(身体の全般症状)と Partial(身体の部分症状)に分けて考えると分かりやすくなります。しかし患者さんは単なる症状の寄せ集めではありません。いったん分けた後は、再統合しなければなりません。またその人の生まれて来てからの出来事や歴史、家族関係、人間関係、文化なども全体像を見る上で重要となってきます。

人は全体的な存在・ホメオパシーのレメディも全体的な存在

レメディも人も同じく全体的な存在です。人を観る時もマテリアメディカ(レメディ薬効書)を読むときもこのことに留意しましょう。

■三つの療法

「三」は非常に基本的な概念です。通常どのようなものにも三つの関係性があります。上と下とその中間、右と左とその中間、好きと嫌いどっちでも良い、熱いと冷たいとその中間、私とあなたと他人、そして何かに「似たもの」と「反対のもの」と「どちらでもないもの」。

病と治療薬の三つの関係性

病と似た現象を起こすもの＝ホメオパシー(Homeopathy)同種療法

反対の現象を起こすもの＝アンチパシー(Antipathy)逆療法(反対療法)

どちらでもないもの＝アロパシー(Allopathy)異種療法(無関係療法)

病と関係性のある薬を使うべき

治療薬というからには病と深い関係性があるべきです。もし病に無関係な薬を使用したらそれはあまり賢明ではありません。三つの療法の中で病と関係性が存在するのは、「病と似た現象を起こすもの(ホメオパシー)」か「病と反対の現象を起こすもの(アンチパシー)」の2つです。

病(症状の総体)と反対の関係性にある薬は存在しない

すでに学んだように、病とは症状の総体です。症状の総体に対して反対の現象を起こす薬があればいいのですが、残念ながら存在しません。反対の作用があるのは、常に「部分」に対してだけなのです。

病(症状の総体)と類似した関係性にある薬は存在する

症状の総体に似た現象を起こすものは存在します。ホメオパシーが有効である理由のひとつは、「病(症状の総体)とレメディに深い関係性が存在すること」なのです。

ホメオパシー的問題解決とは

現代の通常医療はアンチパシーが主な考えです。特定の症状に対して反対の作用がある薬で押さえ込もうとするのです。悪役を見つけてそれを叩く、そういったアンチパシー的問題解決はよく見られますが、ホメオパシーはそのような問題解決方法を取りません。ホメオパシー的な問題解決とはどのようなもののでしょうか。

これから、ホメオパシーを学んで行く際に、いつもこのことを考えてみて下さい。